

「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」報告書〔概要〕 —子どもの頃の体験は、その後の人生に影響する—

平成 22 年 10 月 14 日

〔要旨〕

国立青少年教育振興機構では、幼児期から義務教育修了までの各年齢期における多様な体験(以下、「子どもの頃の体験」という)とそれを通じて得られる資質・能力(以下、「体験の力」という)の関係性を把握し、学校や地域、家庭において、どの年齢期にどのような体験が重要になるのかを明らかにするため、青少年の発達段階に応じた適切かつ効果的な体験活動の推進に関する調査研究を実施した。

調査研究にあたり、子どもの頃の体験(自然体験、動植物とのかかわり、友だちとの遊び、地域活動、家族行事、家事手伝い)と体験の力(自尊感情、共生感、意欲・関心、規範意識、人間関係能力、職業意識、文化的作法・教養)についてそれぞれ調査項目を作成し、成人(20代～60代)対象のウェブ調査と、青少年(小学5年生・6年生、中学2年生、高校2年生)対象の質問紙調査により、それぞれ得られた回答を得点化して、子どもの頃の体験と「体験の力」の関係を見た。

<主な調査結果(成人調査)>

結果① 子どもの頃の体験が豊富な大人ほど、やる気や生きがいを持っている人が多い。

- 子どもの頃の「自然体験」や「友だちとの遊び」、「地域活動」等の体験が豊富な人ほど、「経験したことのないことには何でもチャレンジしてみたい」といった「意欲・関心」や、「電車やバスに乗ったときお年寄りや身体の不自由な人には席をゆずろうと思う」といった「規範意識」、「友だちに相談されることがよくある」といった「人間関係能力」が高い(p.1)。
- 子どもの頃の体験が豊富な人ほど、最終学歴が「大学や大学院」と回答した割合が高く、その他、現在の年収が高かったり、1ヶ月に読む本の冊数が多くなる、結婚している、子どもの数が多い、という割合が高い傾向がみられる(p.2-3)。

結果② 子どもの頃の体験が豊富な大人ほど、

「丁寧な言葉を使うことができる」といった、日本文化としての作法・教養が高い。

- 子どもの頃の体験が豊富な人ほど、「丁寧な言葉を使うことができる」といった「文化的作法・教養」が高い。そして、「文化的作法・教養」5項目は、体験の6つのカテゴリ※すべてと幅広く関係している(p.4)。
※体験のカテゴリ:「自然体験」・「動植物とのかかわり」・「友だちとの遊び」・「地域活動」・「家族行事」・「家事手伝い」

結果③ 小学校低学年までは友だちや動植物とのかかわり、

小学校高学年から中学生までは地域や家族とのかかわりが大切。

- 各年齢期において「体験の力」とより関係している体験は以下のとおりである(p.5)。
 - ・小学校低学年までは「友だちとの遊び」や「動植物とのかかわり」等
 - ・小学校高学年から中学校までは「地域活動」や「家事手伝い」、「家族行事」、「自然体験」等

結果④ 年代が若くなるほど、子どもの頃の自然体験や友だちとの遊びが減ってきている。

- 「夜空いっぱい輝く星をゆっくり見たこと」といった「自然体験」、「すもうやおしくらまんじゅうをしたこと」といった「友だちとの遊び」が若い世代ほど少ない。一方、幼少期での「家族の誕生日を祝ったこと」といった「家族行事」は若い世代ほど増えている(p.6)。
- 「規範意識」、「人間関係能力」、「職業意識」、「文化的作法・教養」等の「体験の力」は、世代が上がるほど高まる(p.7)。



<主な調査結果（青少年調査）>

青少年調査結果① 幼少期から中学生期までの体験が多い高校生ほど、
思いやり、やる気、人間関係能力等の資質・能力が高い。

■幼少期から中学生期までに「動植物とのかかわり」、「地域活動」、「家事手伝い」等の体験が豊富な高校生ほど、「友だちがとても幸せな体験をしたことを知ったら、私までうれしくなる」といった「共生感」、「経験したことの無いことには何でもチャレンジしてみたい」といった「意欲・関心」、「けんかをした友だちを仲直りさせることができる」といった「人間関係能力」が高い(p.8)。

青少年調査結果② 体験が豊富な子どもほど、
携帯電話を持っている・読む本の冊数が多い、という割合が高い。
また、コンピューターゲームやテレビゲーム遊びをしない、という割合が高い。

■幼少期から現在までの体験が豊富な子どもほど、携帯電話を所持する割合が高く、1ヶ月に読む本の冊数が多くなる傾向がみられる(p.9-10)。

■幼少期から現在までの体験が豊富な子どもほど、コンピューターゲームやテレビゲーム等のゲーム遊びの頻度が少ないという傾向がみられる(p.11)。

青少年調査結果③ 小学校低学年までは友達や動植物とのかかわり、
小学校高学年から中学生までは地域や家族とのかかわりが大切。

■高校2年生の結果から、各年齢期において「体験の力」とより関係している体験は以下のとおりである(p.12)。

・小学校低学年までは「友だちとの遊び」「動植物とのかかわり」等

・小学校高学年から中学校までは「地域活動」や「家事手伝い」、「家族行事」、「自然体験」等

調査研究結果概要

◇ 子どもの頃の体験が豊富な大人ほど、やる気や生きがいを持っている人が多い。

【成人調査】

クロス集計の結果、子どもの頃の「自然体験」や「友だちとの遊び」、「地域活動」等の体験が豊富な人ほど、「経験したことの無いことには何でもチャレンジしてみたい」といった「意欲・関心」や、「電車やバスに乗ったとき、お年寄りや身体の不自由な人には席をゆずろうと思う」といった「規範意識」、「友だちに相談されることがよくある」といった「人間関係能力」が高い。

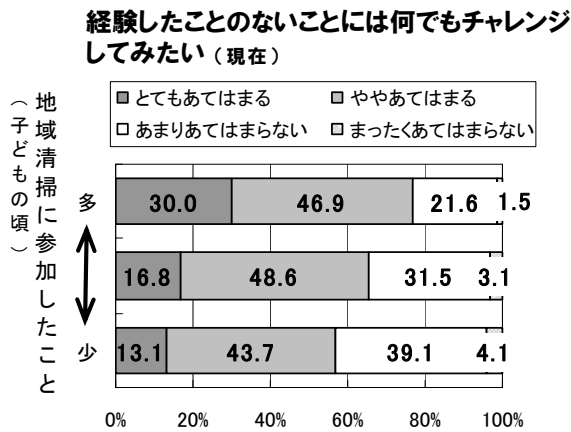


図 3-3-①-21

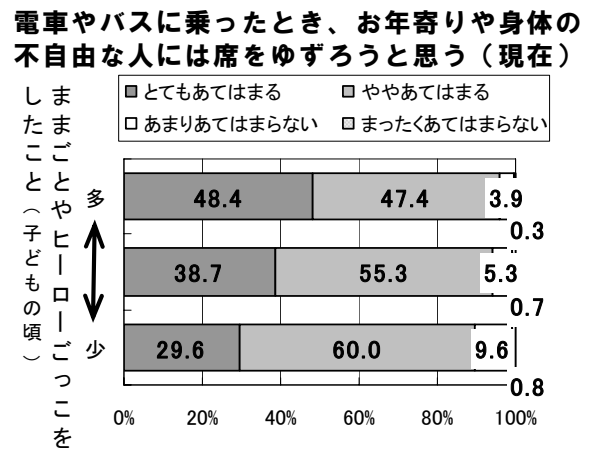


図 3-3-①-18

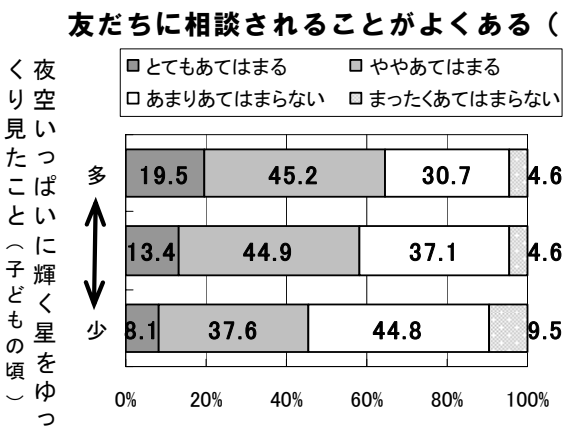


図 3-3-①-2

[意欲・関心]

- ・もっと深く学んでみたいことがある
- ・なんでも最後までやり遂げたい
- ・経験したことの無いことには何でもチャレンジしてみたい
- ・分からないことはそのままにしないで調べたい
- ・いろいろな国に行ってみたい

[規範意識]

- ・叱るべき時はちゃんと叱れる親が良いと思う
- ・交通規則など社会のルールは守るべきだと思う
- ・電車やバスの中で化粧や整髪をしても良いと思う
- ・電車やバスに乗ったとき、お年寄りや身体の不自由な人には席をゆずろうと思う
- ・他人をいじめている人がいると、腹が立つ

[人間関係能力]

- ・人前でも緊張せずに自己紹介ができる
- ・けんかをした友達を仲直りさせることができる
- ・近所の人に挨拶ができる
- ・初めて会った人とでもすぐに話ができる
- ・友達に相談されることがよくある

(注) 図の番号は、「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」報告書の本編に対応させている(以下同じ)。

◇ 子どもの頃の体験が豊富な大人ほど、学歴が高い・収入が多い・読む本の冊数が多い・結婚している・子どもの数が多い、という割合が高い。

【成人調査】

クロス集計の結果、子どもの頃の体験が豊富な大人ほど、最終学歴が「大学や大学院」と回答した割合が高く、その他、現在の年収が高かったり、1ヶ月に読む本の冊数が多くなる傾向がみられる。

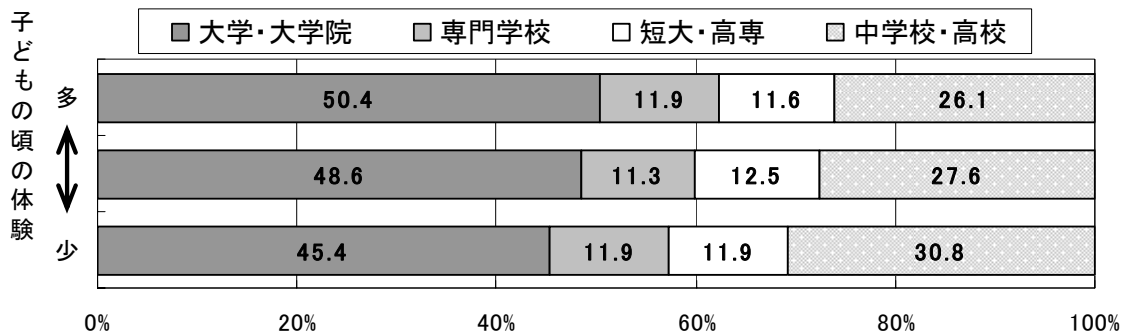
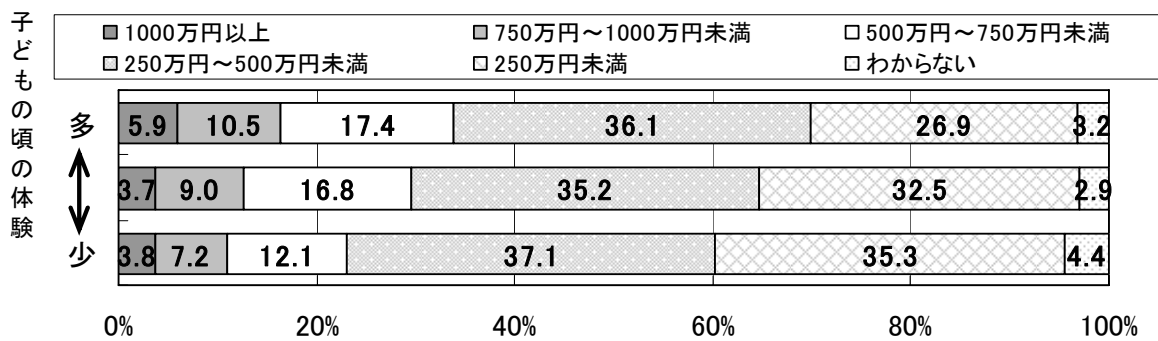


図 3-5-1. 子どもの頃の体験の多寡と「最終学歴」との関係



就業者(3,527人)のみ

図 3-5-2. 子どもの頃の体験の多寡と「現在の年収」との関係

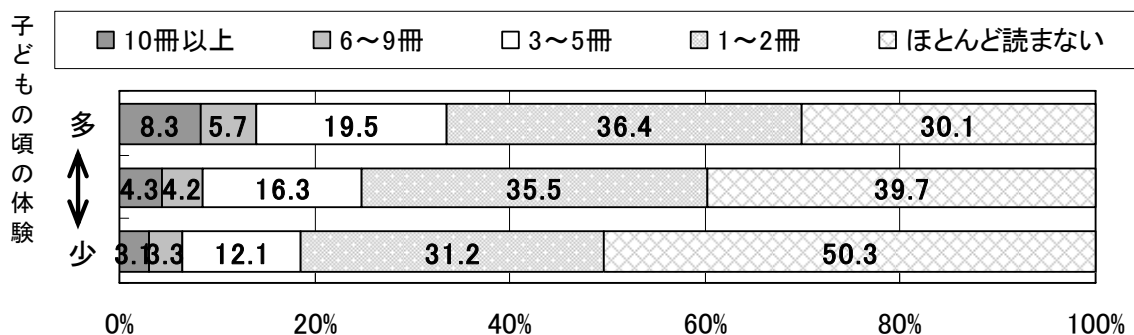


図 3-5-6. 子どもの頃の体験の多寡と「1ヶ月に読む本の冊数」との関係

クロス集計の結果、子どもの頃の体験が少ない群より多い群の方が、結婚している割合が高い。さらに、子どもが2人以上いると回答した割合が高い。

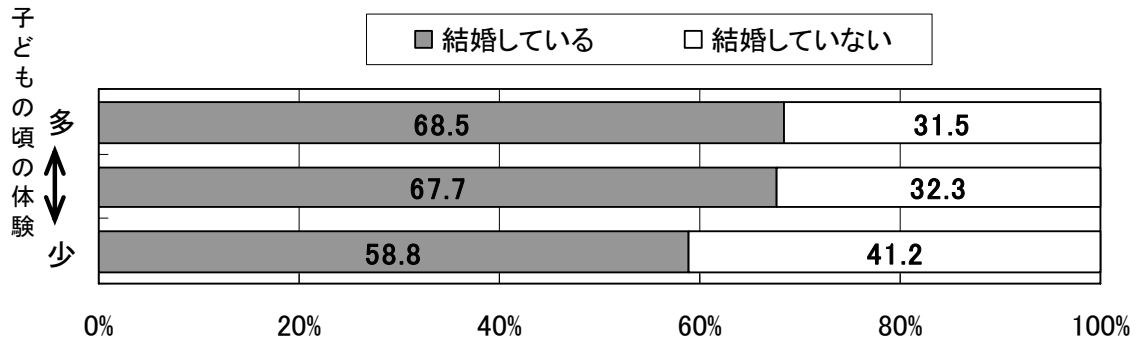


図 3-5-4. 子どもの頃の体験の多寡と「結婚の有無」との関係

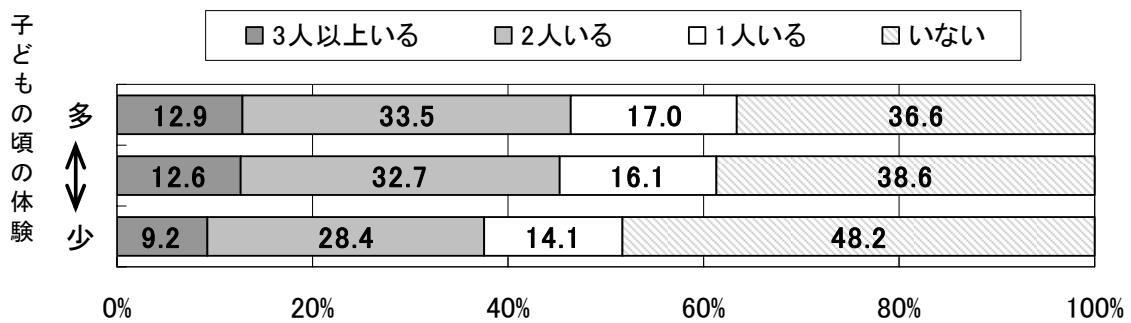


図 3-5-5. 子どもの頃の体験の多寡と「子どもの数」との関係

◇ 子どもの頃の体験が豊富な大人ほど、「丁寧な言葉を使うことができる」といった、日本文化としての作法・教養が高い。

【成人調査】

子どもの頃の体験が豊富な大人ほど、「丁寧な言葉を使うことができる」といった「文化的作法・教養」が高い。そして、「文化的作法・教養」5項目は、体験の6つの各カテゴリすべてと幅広く関係している

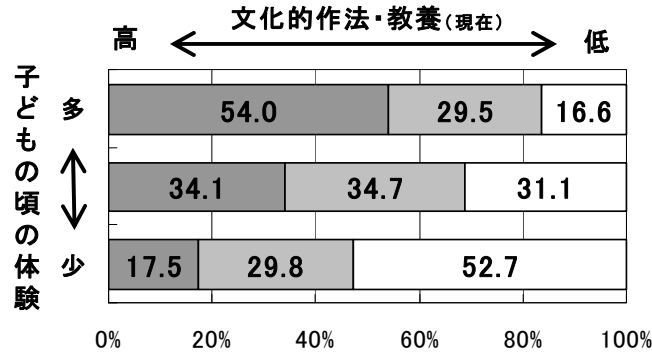


図 3-6-1. 子どもの頃の体験の多寡と「文化的作法・教養」との関係

表 3-6-1. 子どもの頃の体験と「体験の力」のカテゴリ間の関係(相関係数)

	自然体験	動植物とのかかわり	友だちとの遊び	地域活動	家族行事	家事・手伝い
自尊感情	.247**	.218**	.252**	.269**	.265**	.185**
共生感	.292**	.321**	.320**	.324**	.316**	.288**
意欲・関心	.274**	.273**	.299**	.315**	.299**	.296**
規範意識	.175**	.166**	.243**	.190**	.254**	.208**
人間関係能力	.285**	.271**	.333**	.366**	.321**	.304**
職業意識	.185**	.187**	.232**	.229**	.232**	.215**
文化的作法・教養	.304**	.314**	.332**	.346**	.377**	.329**

**p<.01

「文化的作法・教養」のカテゴリのみ、子どもの頃の体験のカテゴリそれぞれとの相関係数がすべて0.3以上を示す。

表 3-6-2. 子どもの頃の体験と「体験の力」のカテゴリ間の関係(相関係数上位の頻度)

	自然体験	動植物とのかかわり	友だちとの遊び	地域活動	家事手伝い	家族行事
自尊感情	4	0	8	8	2	3
共生感	4	6	5	2	4	4
意欲・関心	1	1	6	6	9	3
規範意識	0	1	8	2	6	8
人間関係能力	1	0	7	9	6	2
職業意識	0	0	7	4	9	5
文化的作法・教養	2	2	3	6	8	4

「文化的作法・教養」の5項目と相関係数の高い子どもの頃の体験の項目の頻度をカテゴリで数えてみると、「文化的作法・教養」を構成する項目と関係がある子どもの頃の体験の項目は6つすべてのカテゴリから2項目以上数えることができる。これは「共生感」も類似した結果が出ているが、その他のカテゴリについては、偏りがみられる。

◇ 小学校低学年までは友達や動植物とのかかわり、
小学校高学年から中学生までは地域や家族とのかかわりが大切。

【成人調査】

子どもの頃の体験と「体験の力」の関係を分析(重回帰分析)した結果、小学校低学年までは「友達との遊び」「動植物とのかかわり」等の体験が、「体験の力」と、より関係している。そして、小学校高学年から中学生までは「地域活動」「家族行事」「家事手伝い」等の体験が「体験の力」とより関係している。なお、この結果は、青少年調査と類似している(p.12)。

表 3-3-②. 年齢期別「体験の力」との関係がみられる体験

体験の力	年 齢 期			
	小学校に通う前	小学校低学年	小学校高学年	中学校
自尊感情			地域活動	地域活動 家族行事
共生感		友だちとの遊び 動植物とのかかわり	地域活動	自然体験 地域活動 家族行事
意欲・関心		友だちとの遊び	自然体験	自然体験 地域活動
規範意識	友だちとの遊び	友だちとの遊び 動植物とのかかわり 家族行事	友だちとの遊び 家事手伝い	家族行事 家事手伝い
職業意識	友だちとの遊び	動植物とのかかわり		家族行事 家事手伝い
人間関係能力	自然体験	友だちとの遊び 動植物とのかかわり 家事手伝い	地域活動	友だちとの遊び 地域活動 家族行事 家事手伝い
文化的作法・教養		動植物とのかかわり		地域活動 家族行事 家事手伝い

◇ 関係が見られる各年齢期における体験と「体験の力」の関係についてのクロス集計結果の例
〔小学校に通う前〕

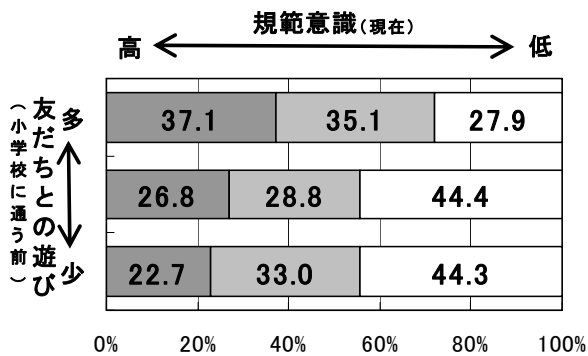


図 3-3-②-1 小学校に通う前の
「友だちとの遊び」と「規範意識」の関係

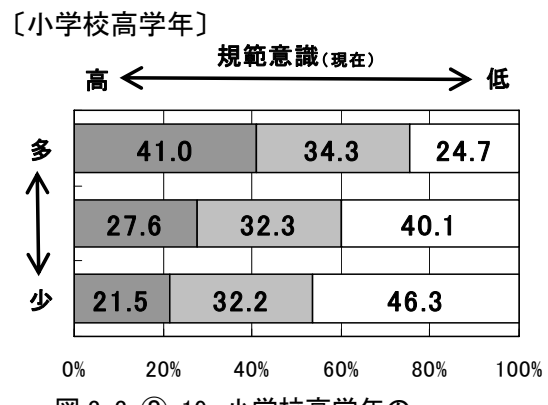


図 3-3-②-19 小学校高学年の
「家事手伝い」と「規範意識」の関係

◇ 年代が若くなるほど、子どもの頃の自然体験や友だちとの遊びが減ってきている。

【成人調査】

「夜空いっぱいに輝く星をゆっくり見たこと」といった「自然体験」, 「弱い者いじめやケンカを注意したり, やめさせたこと」といった「友だちとの遊び」が若い世代ほど少ない。一方, 幼少期での「家族の誕生日を祝ったこと」といった「家族行事」は若い世代ほど増えている。

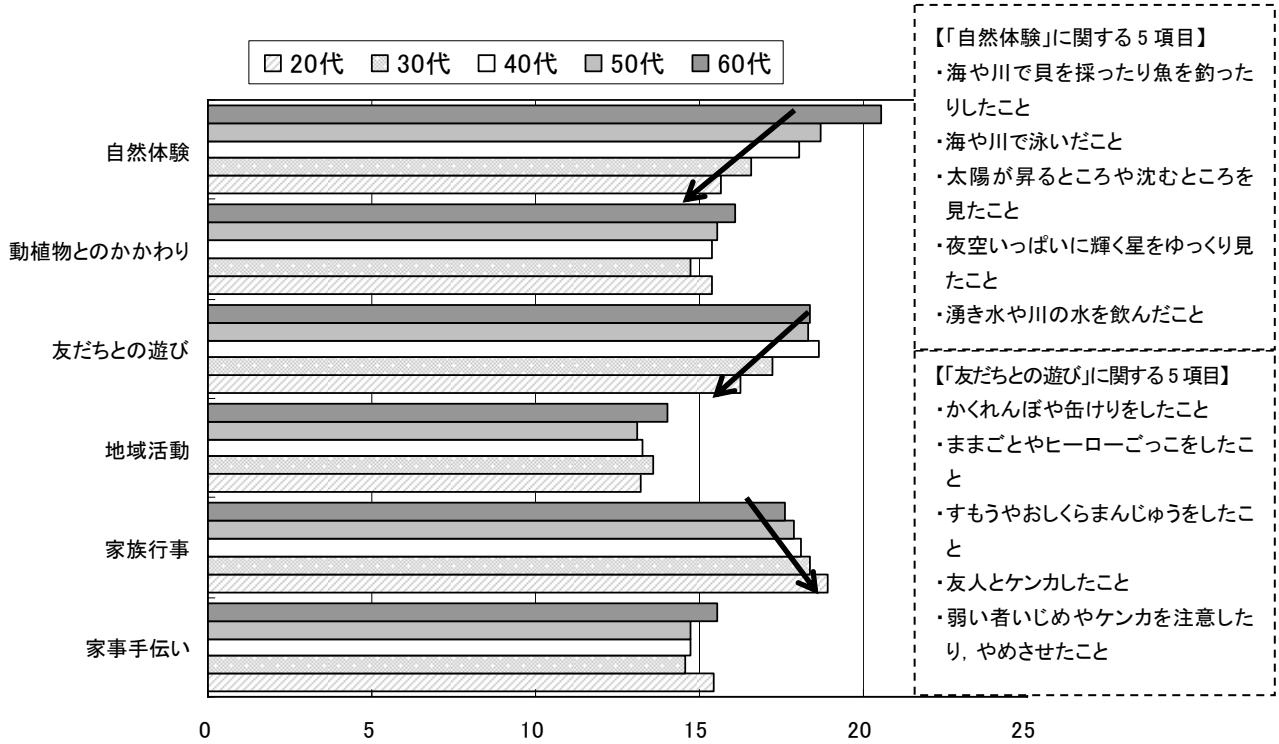


図 3-1 子どもの頃の体験の各カテゴリ別合計得点の平均[0-40 点]

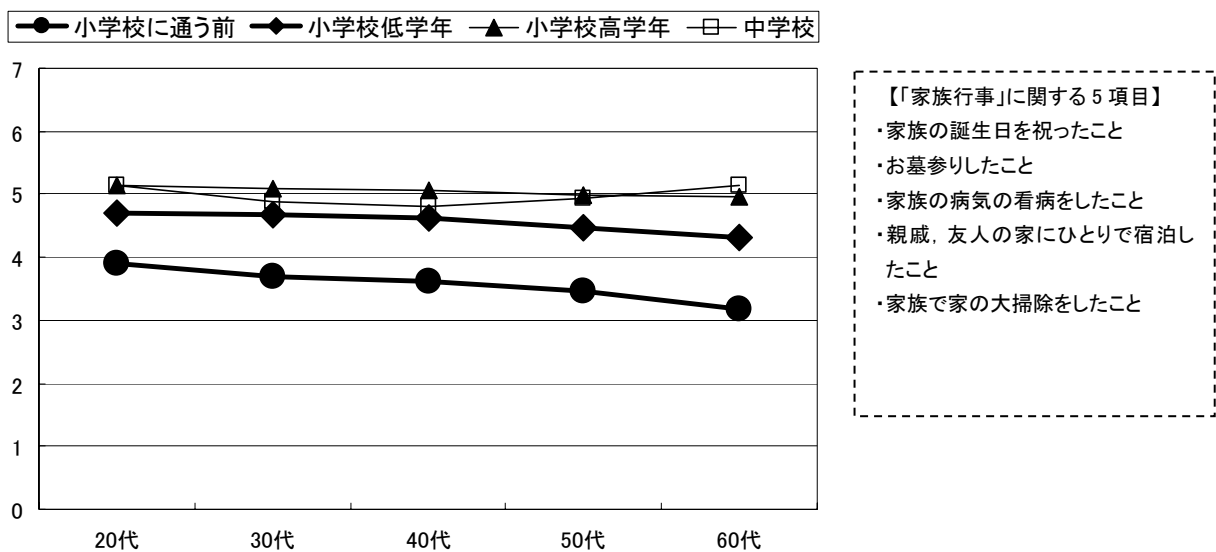


図 3-1-⑤ 「家族行事」各年齢期総得点の平均[0-10 点]

成人調査結果④

◇「規範意識」、「人間関係能力」、「職業意識」、「文化的作法・教養」は、世代が上がるほど高まる。

【成人調査】

「お年寄りや身体の不自由な人には席をゆずろうと思う」といった「規範意識」、「友だちに相談されることがよくある」といった「人間関係能力」、「できれば、社会や人のためになる仕事をしたいと思う」といった「職業意識」等の「体験の力」は、年代が上がるほど、得点が高くなる傾向がみられる。

「体験の力」カテゴリ:「自尊感情」、「共生感」、「意欲・関心」、「規範意識」、「人間関係能力」、「職業意識」、「文化的作法・教養」

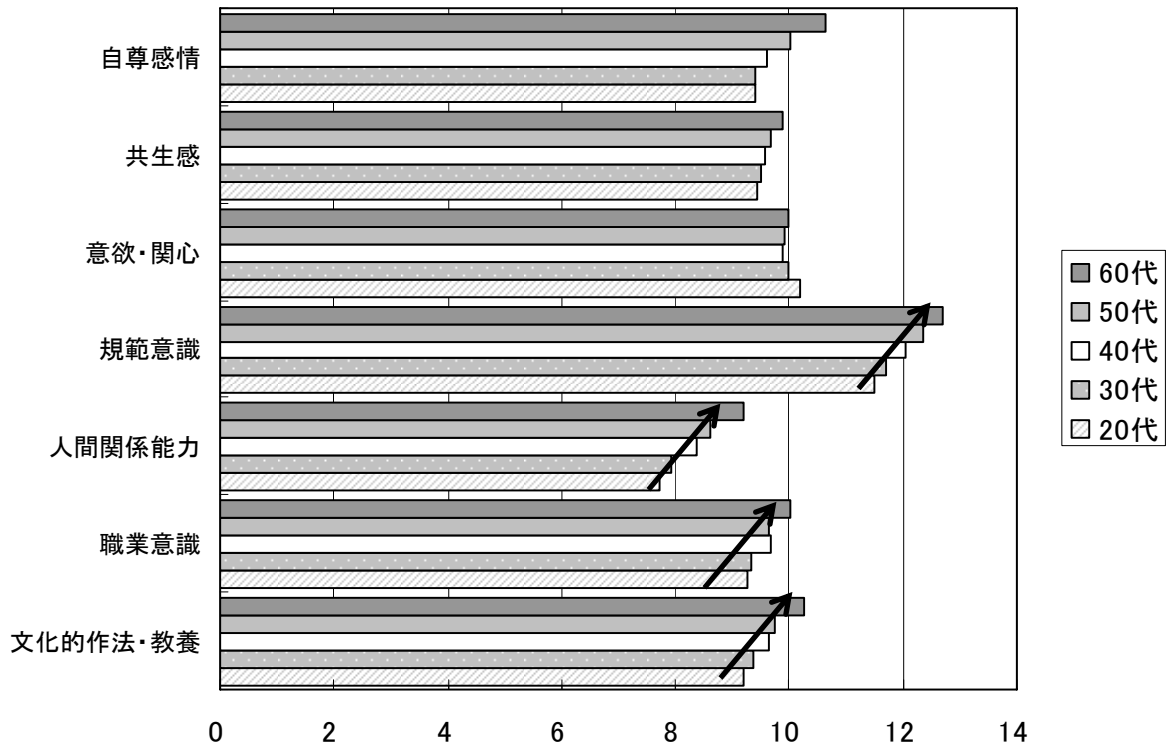


図 3-2 「子どもの頃の体験」年代別総得点の平均 [0-15 点]

<p>【規範意識】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・叱るべき時はちゃんと叱れる親が良いと思う ・交通規則など社会のルールは守るべきだと思う ・電車やバスの中で化粧や整髪をしても良いと思う ・電車やバスに乗ったとき、お年寄りや身体の不自由な人には席をゆずろうと思う ・他人をいじめている人がいると、腹が立つ 	<p>【人間関係能力】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人前でも緊張せずに自己紹介ができる ・けんかをした友だちを仲直りさせることができる ・近所の人に挨拶ができる ・初めて会った人とでもすぐに話ができる ・友だちに相談されることがよくある
<p>【職業意識】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分にはなりたい職業や、やってみたい仕事がある ・大人になったら仕事をするべきだと思う ・できれば、社会や人のためになる仕事をしたいと思う ・お金が十分にあれば、できれば仕事はやりたくないと思う ・今が楽しければ、それでいいと思う 	<p>【文化的作法・教養】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お盆やお彼岸にはお墓参りに行くべきだと思う ・目上や年下の人と話すときは丁寧な言葉を使うことができる ・ひな祭りや子どもの日、七夕、お月見などの年中行事が楽しみだ ・はしを上手く使うことができる ・日本の昔話を話すことができる

◇ 幼少期から中学生期までの体験が多い高校生ほど、思いやり、やる気、人間関係能力等の資質・能力が高い。

【青少年調査(高2結果)】

高校2年生の結果を用いクロス集計を行ったところ、幼少期から中学生期までに「動植物とのかかわり」、「地域活動」、「家事手伝い」等の体験が豊富な高校生ほど、「友だちがとても幸せな体験をしたことを知ったら、私までうれしくなる」といった「共生感」、「経験したことの無いことには何でもチャレンジしてみたい」といった「意欲・関心」、「けんかをした友だちを仲直りさせることができる」といった「人間関係能力」が高い。

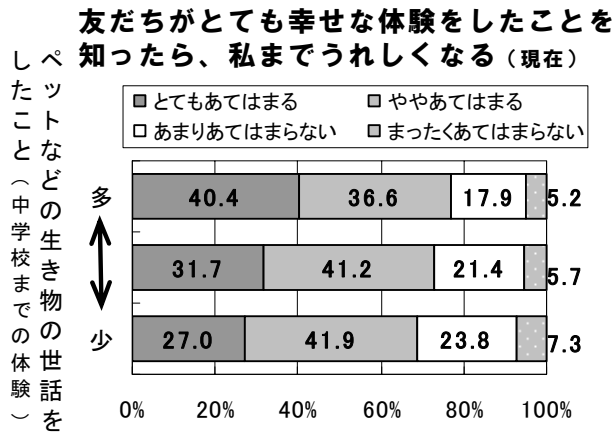


図 4-3-①-8

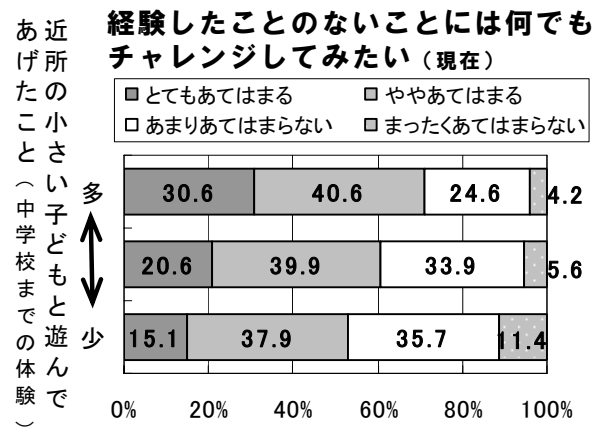


図 4-3-①-16

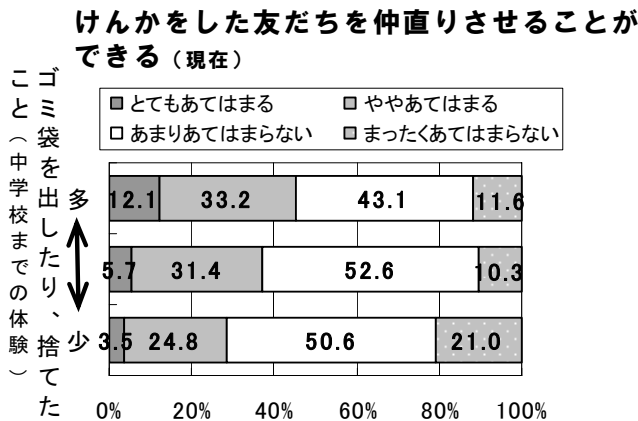


図 4-3-①-33

【共生感】

- ・休みの日は自然の中で過ごすことが好きである
- ・動物園や水族館などに行くのが好きである
- ・悲しい体験をした人の話を聞くとつらくなる
- ・友だちがとても幸せな体験をしたことを知ったら、私までうれしくなる
- ・人から無視されている人のことが心配になる

【意欲・関心】

- ・もっと深く学んでみたいことがある
- ・なんでも最後までやり遂げたい
- ・経験したことの無いことには何でもチャレンジしてみたい
- ・分からないことはそのままにしないで調べたい
- ・いろいろな国に行ってみたい

【人間関係能力】

- ・人前でも緊張せずに自己紹介ができる
- ・けんかをした友達を仲直りさせることができる
- ・近所の人に挨拶ができる
- ・初めて会った人とでもすぐに話ができる
- ・友だちに相談されることがよくある

◇ 体験が豊富な子どもほど、携帯電話を持っている・読む本の冊数が多い、という割合が高い。また、コンピューターゲームやテレビゲーム遊びをしない、という割合が高い。

【青少年調査】

クロス集計の結果、幼少期から現在までの体験が豊富な子どもほど、携帯電話を所持する割合が高く、1ヶ月に読む本の冊数が多くなる傾向がみられる。

携帯電話を持っている子どもの割合

[小学校 5 年生]

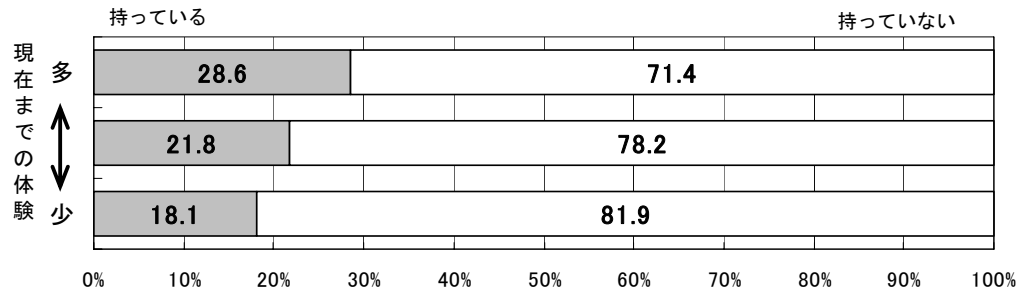


図 4-5-①-1

[小学校 6 年生]

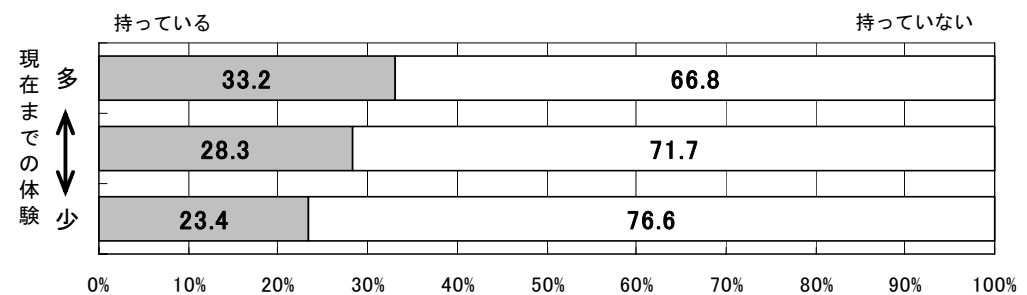


図 4-5-①-2

[中学 2 年生]

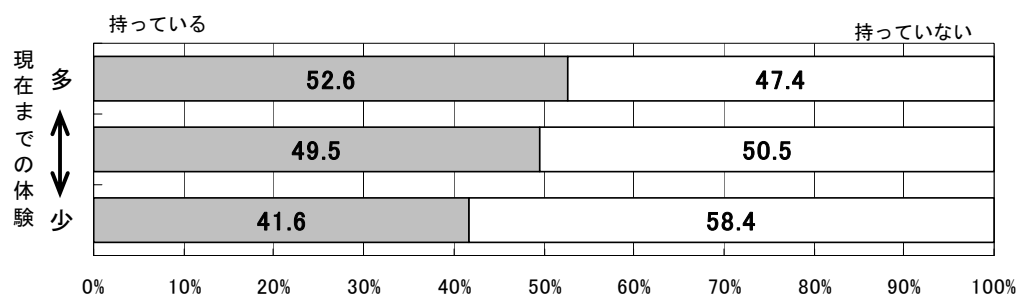


図 4-5-①-3

[高校 2 年生]

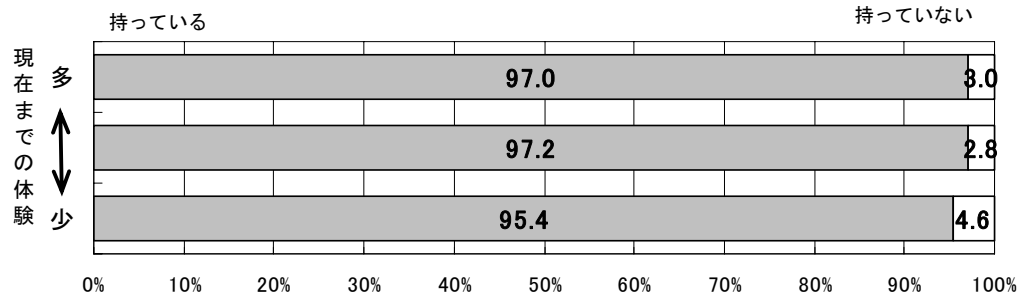


図 4-5-①-4

1ヶ月に読む本の冊数

〔小学校 5 年生〕

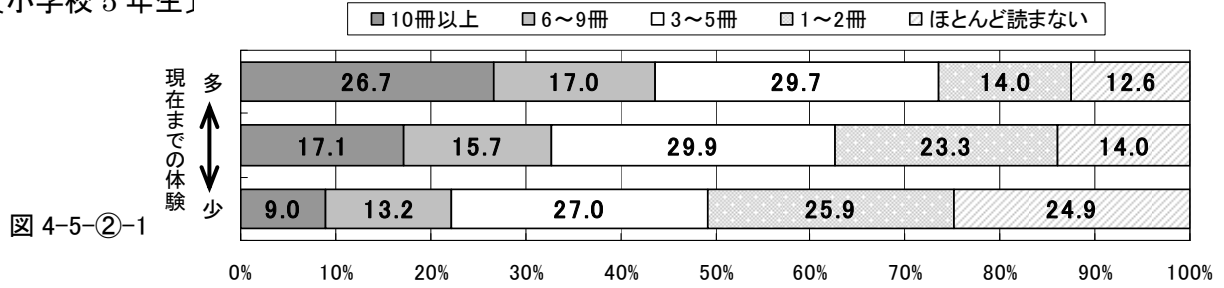


図 4-5-②-1

〔小学校 6 年生〕

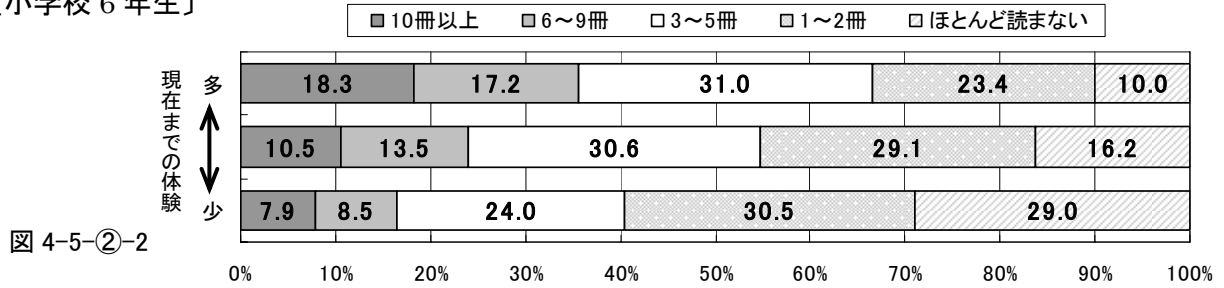


図 4-5-②-2

〔中学 2 年生〕

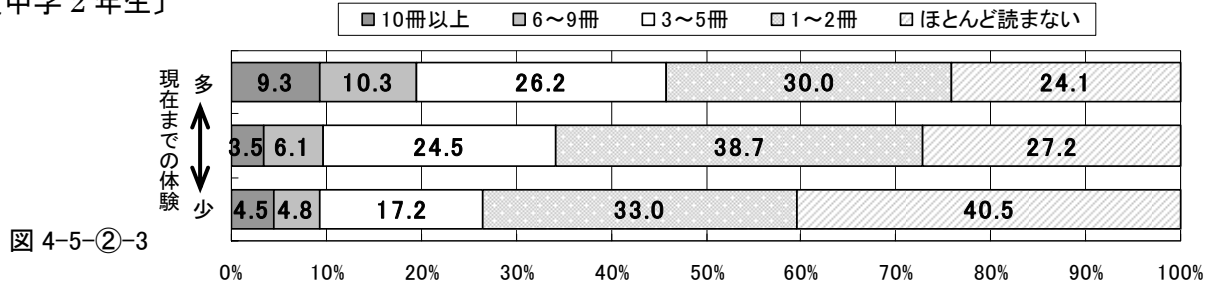


図 4-5-②-3

〔高校 2 年生〕



図 4-5-②-4

クロス集計の結果、幼少期から現在までの体験が豊富な子どもほど、コンピューターやテレビゲーム等のゲーム遊びの頻度が少ないという傾向がみられる。

コンピューターゲームやテレビゲーム遊びの頻度

[小学校 5 年生]

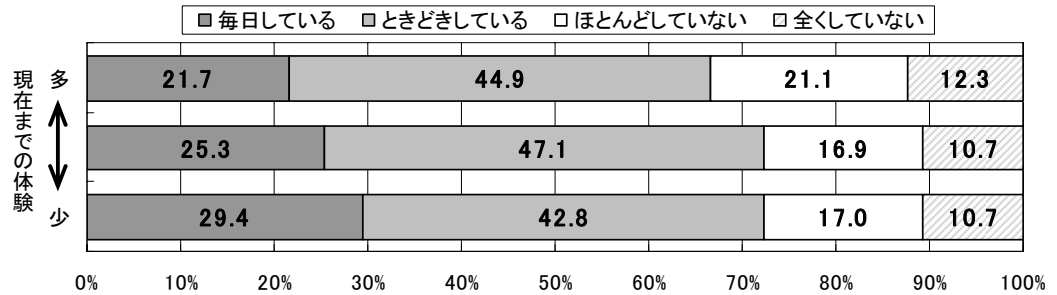


図 4-5-③-1

[小学校 6 年生]

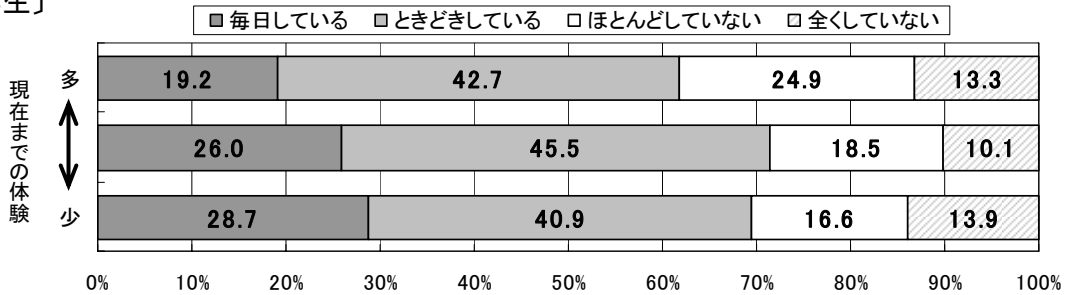


図 4-5-③-2

[中学 2 年生]

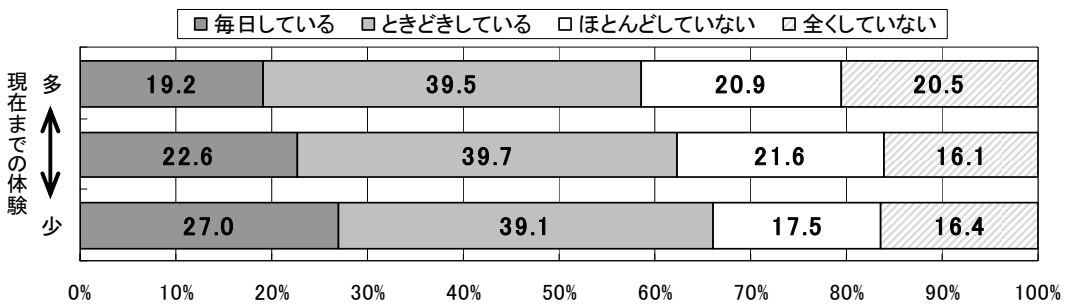


図 4-5-③-3

[高校 2 年生]

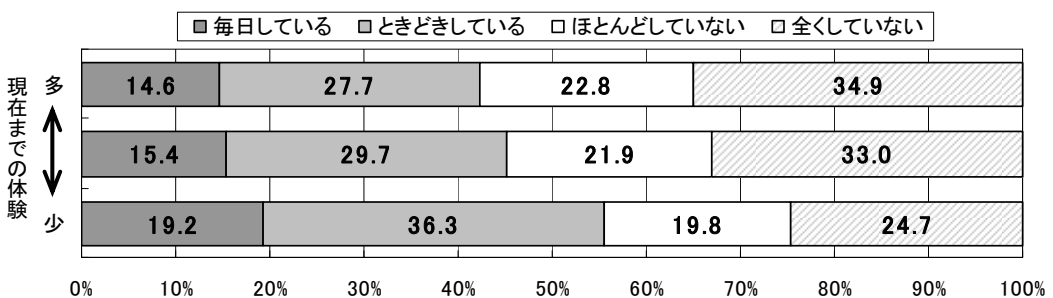


図 4-5-③-4

◇ 小学校低学年までは友だちや動植物とのかかわり、
小学校高学年から中学生までは地域や家族とのかかわりが大切。

【青少年調査(高2結果)】

高校2年生の結果を用い、子どもの頃の体験と「体験の力」の関係を分析(重回帰分析)したところ、小学校低学年までは「友だちとの遊び」「動植物とのかかわり」等の体験が、「体験の力」と、より関係している。そして、小学校高学年から中学生までは「地域活動」「家族行事」「家事手伝い」「自然体験」等の体験が「体験の力」とより関係している。なお、この結果は、成人調査と類似している(p.5)。

表 4-3-②. 年齢期別「体験の力」との関係が見られる体験

体験の力	年 齢 期			
	小学校に通う前	小学校低学年	小学校高学年	中学校
自尊感情		友だちとの遊び	家事手伝い	地域活動 家族行事
共生感		友だちとの遊び 動植物とのかかわり 地域活動		自然体験 地域活動 家族行事 家事手伝い
意欲・関心		友だちとの遊び 動植物とのかかわり		地域活動 家事手伝い
規範意識	友だちとの遊び 家族行事	友だちとの遊び 動植物とのかかわり	家事手伝い	自然体験 地域活動 家族行事
職業意識			動植物とのかかわり	自然体験 地域活動 家族行事
人間関係能力		友だちとの遊び		自然体験 友だちとの遊び 地域活動 家族行事
文化的作法・教養		家族行事	動植物とのかかわり	地域活動 家族行事 家事手伝い

◇ 関係が見られる各年齢期における体験と「体験の力」の関係についてのクロス集計結果の例

[小学校に通う前]

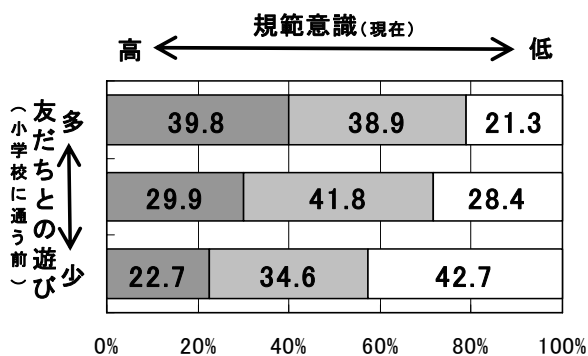


図 4-3-②-1 小学校に通う前の「友だちとの遊び」と「規範意識」の関係

[小学校高学年]

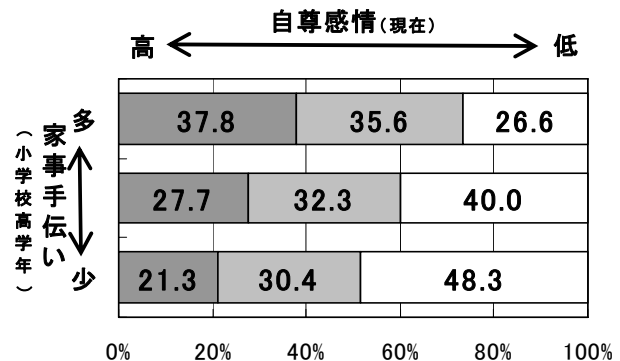


図 4-3-②-13 小学校高学年の「家事手伝い」と「自尊感情」の関係

本研究のまとめ

千葉大学教育学部教授（研究会座長） 明石 要一

①「体験活動」をなぜ問題にするのか

本研究会は「子どもの体験活動の実態」を明らかにすることを目的にしている。具体的には子どもの頃の体験が子どもの成長にとってどんな体験が大切か、を明らかにする。それはなぜか。理由は二つある。

一つは、「体験格差」が子どもの学力格差を生む社会状況になってきているからである。経済格差が直接に学力格差を生むのではなく、経済格差が体験格差を生み、それが学力格差をもたらすつながりができあがっている。しかし、今子どもの体験活動はどうなっているかの基礎調査が乏しい。子どもはいうまでもなく、大人世代の子どもの頃の体験活動はどうであったか、のデータも不足している。

二つ目は、体験は子どもの成長に欠かせない、体験をするとひとかどの人間になる、という言説がある。しかし、子どもの成長にどんな体験がよいのか、その体験は何時の段階にすればよいか、そして、体験を通してどんな力が身につくのか、さらに、子ども時代に豊かな体験をした者は大人になったときどんなインパクトを与えるのか、という課題に答える基礎調査がない。

②研究会が用意した問い(Q)と答え(A)

1) 子ども頃の体験は、大人になったときどんなインパクト(教育的な効果)を与えるのか

成人調査から答える。

◇子どもの頃、「自然体験」、「動植物とのかかわり」、「友達との遊び」、「地域活動」、「家族行事」、「家事手伝い」といった体験が多いほど、大人になってからの「自尊感情」、「共生感」、「意欲・関心」、「規範意識」、「人間関係能力」、「職業意識」、「文化的作法・教養」といった「体験の力」が高い。

6領域の体験を分けているが、それらの多くの項目は7領域に分けた「体験の力」と関係していることがわかった。これまでの研究では、体験活動と「規範意識」は関係がある、という知見はあったがこれほどの総合的なアプローチでの結果は初めてである。

2) 子どもの頃のどの時期にどんな体験をすれば効果的か

子どもの頃の体験と大人になってからの体験の力の結びつきを調べた結果、次のことがわかった。

- ・小学校低学年までは「友達との遊び」と「動植物とのかかわり」が体験の力に関係している。
- ・小学校高学年から中学生までは「地域活動」、「家族行事」、「家事手伝い」等が体験の力に関係している。

「体験」はいつでも効果的とは限らない。子どもの成長に合わせた「体験活動」があるようだ。今後はこの知見を踏まえた体験活動の提供が求められる。「卒啄（そったく）の時」という諺がある。雛が内から殻を破ろうとする鳴き声に答えて親が外から殻をつついてあげる、という意味である。ベストチャンスがあるのである。

3)子どもの頃の体験は、大人になったとき社会的な地位に影響を与えるのか

子どもの頃の体験が多いほど最終学歴が高い、という結果がある。

◇子どもの頃の体験が多いほど最終学歴が高い。その体験は、次のとおりである。

- ・「海や川で貝を採ったり、魚を釣ったりした」
- ・「海や川で泳いだ」
- ・「米や野菜などを栽培した」
- ・「チョウやトンボ、バッタなどの昆虫をつかまえた」という積極的な自然体験をした者である。

また、「弱い者いじめやケンカを注意した」り、「かくれんぼや缶けりをした」、それから「地域清掃に参加した」、「家族で家の大掃除をした」、「家族の誕生日を祝った」等をしている。

◇青少年施設や社会教育施設を利用した者ほど、最終学歴が高い。

◇お稽古・習い事をした者ほど、最終学歴が高い。

◇子どもの頃の体験が多いほど年収が多い。その体験は、次のとおりである。

ここでも積極的な体験が大きなウエイトを占める。それ以外では、おしくらまんじゅうのような遊び体験や、地域の人に叱られた、地域掃除に参加したという地域とのかかわり等があがる。

◇最終学歴、年収という社会的な地位の形成と関係している体験はほぼ同じ結果を得る。

4)子どもの頃の体験は社会生活にどんな影響を与えるか

◇体験が多いほどそうでない者に比べて、結婚している割合が多く、子どもを二人以上持っている。

◇体験が多い者ほど一ヶ月に読む本の冊数が多い。

5) 青少年調査から何が言えるか

青少年調査でも、成人調査とほぼ同じ結果を指摘できる。

◇幼少期から中学生期までの体験の多寡は、高校生の「体験の力」に関係している。

◇体験が多い子どもほど、本を読んでおり、コンピューターゲームやテレビゲーム遊びが少ない。

◇「自然体験」、「動植物とのかかわり」、「友だちとの遊び」は高校生と比べると中学生の方が少ない。

中学生の方がこうした体験が少なくなる。しかし、「家族行事」では高校生より、中学生の方が多く体験している。他のデータからも同じ結果が伺える。不況の影響で家庭での団らんを含めて家族行事が増えているようだ。家庭回帰の兆しが見え始めているのかもしれない。

6) 因子分析による新たな知見

子どもの頃の体験 30 項目及び、「体験の力」35 項目を因子分析した結果、次のことがわかった。

◇成人と青少年では、項目を構成する因子*（以後「かたまり」と表現する）が異なる。

・子どもの頃の体験 30 項目について

成人調査では「自然体験」に関する項目が第一に「かたまり」をつくり、次が「家事手伝い」に関する項目、三番目が「地域活動」に関する項目である。

また、成人調査ではこちらがあらかじめ想定した項目同士が同じ「かたまり」を示した。例えば、「自然体験」の項目で、「夜空いっぱいに輝く星をゆっくり見た」、「太陽が昇るところや沈むところを見た」、「海や川で貝を採ったり、魚を釣ったりした」、「湧き水や川の水を飲んだ」、「海や川で泳いだ」は同じ「かたまり」をつくっている。

青少年調査では成人調査とは異なり、「家事手伝い」に関する項目が第一に「かたまり」をつくり、次が「自然体験」と「動植物とのかかわり」に関する項目（ミックスされている）、三番目が「地域活動」に関する項目である。

・「体験の力」35 項目について

成人調査では「規範意識」に関する項目が第一に「かたまり」をつくる。それら項目は社会通念上、常識と呼ばれる事柄である。次が「人間関係能力」に関する項目、三番目が「意欲・関心」に関する項目である。

また、青少年調査では第一因子は「規範意識」を中心とした常識に関する項目が同じ「かたまり」を示した。次が「共生感」である。三番目に「人間関係能力」が来る。

「自尊感情」では成人と青少年は若干意味が異なる。成人は「自分，家族，学校，地域，日本」が一つの「かたまり」をつくるが，青少年では「自分と家族」の「かたまり」と「学校，地域，日本」の「かたまり」で分かれている。

※ 因子とは，「因子分析」という統計技法を用いることで，得られる。因子分析は，多数の項目間の関係等によって「かたまり」をつくり出す。それによって，心理尺度等の全体的特徴を理解しようとするもの。

③残された課題

- 1) 体験の持つ意味の量的な側面はかなり発見できた。次は「質的な側面」の解明である。具体的には，特定の人物を対象に量的調査で得られた知見を検証することである。
- 2) 成人調査と青少年調査では，ほぼ同じ傾向が認められた。しかし，「体験」の持つ意味が異なる側面も見いだされた。これからは，具体的な体験がどのような「かたまり」を形作り，それらから身につくであろう「体験の力」の「かたまり」はどのような年齢ステージごとに明らかにしていく必要がある。
- 3) 日本の「体験」と諸外国の「体験」は同じ意味を持つのか，の比較検討が必要だ。「体験の力」では規範意識を中心とした常識が中核をなしているが，これは国によって異なる。特殊なものや普遍的なものをはっきりさせなければならない。

本研究をふりかえって

国立青少年教育振興機構 理事長

田中 壮一郎

青少年が心身ともに健やかに成長していく上で、様々な体験をすることが重要であることは国民にも広く浸透しているが、近年その影響に関する実証的な調査はあまりされていないように感じていた。そこで、千葉大学の明石教授に、子どもの頃の体験と、一人前の人間として身につけるべき生きる力のうち、知識を除いたもの（「体験の力」）について調査研究をお願いしたところ御快諾いただき、今回の調査がスタートした。明石先生の御尽力により、優れた研究者による調査研究協力者会議が設けられ、「子どもの頃の体験が豊かな人は、充実した人生を送っているのではないか」との仮説のもと、調査とその分析がなされ、今回のような結論を得ることができた。明石先生をはじめ、調査研究協力者会議のメンバーの先生方に心より感謝申し上げる。

なお、私としても、今回の調査において、若干の分析を試みたので、ここで報告させていただく。

- 今回の調査において「体験」については、①自然体験、②動植物とのかかわり、③友だちとの遊び、④地域活動、⑤家族行事、及び⑥家事・手伝いの6つのカテゴリーに区分し、それぞれのカテゴリーに5項目の質問を設定した。

また、「体験の力」としては、①自尊感情、②共生感、③意欲・関心、④規範意識、⑤人間関係能力、⑥職業意識、及び⑦文化的作法・教養の7つのカテゴリーに区分し、同じくカテゴリー別に5項目の質問を設定した。したがって、調査の結果としてそれぞれの項目間 $30 \times 35 = 1050$ 組の相関関係を把握することができたが、このうち相関関係の強いものを30組取り上げてみたところ、本報告書別冊資料 p21-25 のとおりとなっている。

- この30組を「体験」の面からみると、地域活動に関する項目及び家事・手伝いに関する項目がそれぞれ30組のうち7項目、ついで友だちとの遊びが6項目、自然体験及び動植物とのかかわりがそれぞれ4項目、家族行事が2項目となっており、特に「バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席をゆずったこと」（地域活動）及び「弱い者いじめやケンカを注意したり、やめさせたこと」（友だちとの遊び）が5項目となっている。また

表1 「体験の力」との相関がみられる30項目の内訳(子どもの頃の体験)

子どもの頃の体験	項目数
地域活動 バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席をゆずったこと(5) 祭りに参加したこと(1) 近所の小さい子どもと遊んであげたこと(1)	7
家事手伝い 家の中の掃除や整頓を手伝ったこと(3) 食器をそろえたり、片付けたりしたこと(2) ナイフや包丁で、果物の皮をむいたり、野菜を切ったこと(1) 洗濯をしたり干したりしたこと(1)	7
友だちとの遊び 弱い者いじめやケンカを注意したり、やめさせたこと(5) ままごとやヒーローごっこをしたこと(1)	6
動植物とのかかわり 花を育てたこと(2) チョウやトンボ、バッタなどの昆虫をつかまえたこと(1) 野鳥を見たり、鳴く声を聞いたこと(1)	4
自然体験 夜空いっばいに輝く星をゆっくり見たこと(2) 海や川で貝を採ったり、魚を釣ったりしたこと(1) 湧き水や川の水を飲んだこと(1)	4
家族行事 お墓参りをしたこと(1) 家族で家の大掃除をしたこと(1)	2

(家事・手伝い)では、「家の中の掃除や整頓を手伝ったこと」が3項目であり、「家族で家の大掃除をしたこと」(家族行事)も加えると「お手伝い」関係は8項目となる。

また、「体験の力」の面からみると、カテゴリー間で大きな差が出ており、人間関係能力が12項目、文化的作法・教養が11項目、共生感が6項目あるのに対して、意欲・関心は1項目、自尊感情、規範意識及び職業意識は1項目も30傑に登場していない。具体的にみると、「日本の昔話を話すことができる」(文化的作法・教養)が8項目と一番多く、「友だちに相談されることがよくある」(人間関係能力)が6項目、「休みの日は自然の中で過ごすことが好きである」(共生感)5項目となっている。

3. 次に項目間の関係をみると、「弱い者いじめやケンカを注意したり、やめさせたこと」が何度もあった人が「ケンカをした友だちを仲直りさせることができる」や「友だちに相談されることがよくある」の割合が高くなっていることは当然だと感じられるが、一見直接関係がなさそうに見える「日本の昔話を話すことができる」こととも相関関係が見られる。

表2 子どもの頃の体験と相関がみられる30項目の内訳(「体験の力」)

体験の力	項目数
人間関係能力 友達に相談されることがよくある(6) けんかをした友達を仲直りさせることができる(2) 初めて会った人とでもすぐに話ができる(2) 人前でも緊張せずに自己紹介ができる(2)	12
文化的作法・教養 日本の昔話を話すことができる(8) お盆やお彼岸にはお墓参りに行くべきだと思う(1) ひな祭りや子どもの日、七夕、お月見などの年中行事が楽しみだ(2)	11
共生感 休みの日は自然の中で過ごすことが好きである(5) 悲しい体験をした人の話を聞くとつらくなる(1)	6
意欲・関心 なんでも最後までやり遂げたい(1)	1

表3. 相関関係がみられた組み合わせの例①

子どもの頃の体験	体験の力	相関係数
弱い者いじめやケンカを注意したり、やめさせたこと(友だちとの遊び)	けんかをした友達を仲直りさせることができる(人間関係能力)	.368**
	初めて会った人とでもすぐに話ができる(人間関係能力)	.259**
	人前でも緊張せずに自己紹介ができる(人間関係能力)	.269**
	日本の昔話を話すことができる(文化的作法・教養)	.246**
	友達に相談されることがよくある(人間関係能力)	.294**
バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席をゆずったこと(地域活動)	日本の昔話を話すことができる(文化的作法・教養)	.272**
食器をそろえたり、片付けたりしたこと(家事手伝い)		.266**
家の中の掃除や整頓を手伝ったこと(家事手伝い)		.260**
花を育てたこと(動植物とのかかわり)		.255**
夜空いっぱい輝く星をゆっくり見たこと(自然体験)		.253**
ナイフや包丁で、果物の皮をむいたり、野菜を切ったこと(家事手伝い)		.252**
弱い者いじめやケンカを注意したり、やめさせたこと(友だちとの遊び)		.246**
洗濯をしたり干したりしたこと(家事手伝い)		.241**

「バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席をゆずったこと」「食器をそろえたり片付けたりしたこと」「家の中の掃除や整頓を手伝ったこと」「花を育てたこと」「夜空いっぱい輝く星をゆっくり見たこと」「洗濯をしたり干したりしたこと」も「日本の昔話を話すことができる」ことと深く関連している。

近年子どもたちの体験に関して「目的」を明確にし、「指導方法」を確立することが大切だと言われ、また、いじめや不登校の防止等を目的とした特別なカリキュラムの開発が行われている。私も、このことは大変大切な視点であり、重要な試みであると考えているが、特定の体験活動を1時間や2時間、あるいは、1日や2日実施することで子どもやクラスが変化することを期待することはむずかしいのではないかと感じている。また、例えば、「いじめ」を解消するためには、私も、子ども達にいじめが卑劣な行為であることを理解させるとともに、いじめを早期発見し、適切な対応を行うことが大切であると考えている。しかし、それだけで本当にいじめが解消できるだろうか。子ども達の持っているフラストレーションやストレス、学校に対する閉塞感を解消することが不可欠ではないだろうか。そのためにも子ども達が仲間同士で、あるいは異年齢集団で日常的に打ち込むことができ、それによって充足感や達成感の感じられる様々な体験活動をさせることが大切ではないかと考えてきた。

今回の結果を見ると、例えば上記のように、子どもの頃の様々な体験が日本の昔話ができるということと相関関係が示されており、体験の内容やその実施方法も大切なことかもしれないが、そのことよりも、体験の力、ひいては生きる力を育てていくためには幼少年期を通じて、日常生活の中で、様々な自然体験、生活体験、社会体験を積み重ねていくことがより重要であることの証明ではないだろうか。したがって、今後このような点を十分認識した上で、子どもたちが日々様々な活動を体験できるよう、それぞれの地域で、活動の機会や場の整備・充実を図っていくことが私たちに課せられている大きな課題であると感じている。

4. 鳩山前総理は平成21年10月の所信表明演説の中で「新しい公共」の必要性を強調され、私も携わった新しい教育基本法においてはこの新しい公共を支える「公共の精神」の大切さが明記されている。

今回の調査においては新しい公共を支える意識、例えば、「電車やバスに乗ったときお年寄りや身体の不自由な人には席をゆずろうと思う」（規範意識）、「できれば社会や人のためになる仕事をしたいと思う」（職業意識）との関係についても分析している。

「電車やバスに乗ったときお年寄りや身体の不自由な人には席をゆずろうと思う」ことについては「バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席をゆずったこと」との相関関係が一番高くなっているが、「家の中の掃除や整頓を手伝ったこと」「かくれんぼや缶けりをしたこと」「食器をそろえたり片付けたりしたこと」「家族で家の大掃除をしたこと」との相関関係もみられる。

また、「できれば社会や人のためになる仕事をしたいと思う」では、「家の中の掃除や整頓を手伝ったこと」「家族で家の大掃除をしたこと」「近所の小さい子どもと遊んであげたこと」「かくれんぼや缶けりをしたこと」「バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席をゆずったこと」「すもうやおしくらまんじゅうをしたこと」などが相関関係を示している。

表4. 相関関係がみられた組み合わせの例②

子どもの頃の体験	体験の力	相関係数
バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席をゆずったこと（地域活動）	電車やバスに乗ったとき、お年寄りや身体の不自由な人には席をゆずろうと思う（規範意識）	.226**
家の中の掃除や整頓を手伝ったこと（家事手伝い）		.219**
かくれんぼや缶けりをしたこと（友だちとの遊び）		.203**
食器をそろえたり、片付けたりしたこと（家事手伝い）		.201**
家族で家の大掃除をしたこと（家族行事）		.198**
家の中の掃除や整頓を手伝ったこと（家事手伝い）	できれば、社会や人のためになる仕事をしたいと思う（職業意識）	.206**
家族で家の大掃除をしたこと（家族行事）		.196**
近所の小さい子どもと遊んであげたこと（地域活動）		.184**
かくれんぼや缶けりをしたこと（友だちとの遊び）		.181**
バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席をゆずったこと（地域活動）		.177**
すもうやおしくらまんじゅうをしたこと（友だちとの遊び）		.177**

以上のように、今回の調査により、あまり関係があると思われなような様々な体験が多様な体験の力と相関関係があることが判明した。その中で特に「新しい公共」という観点から今回の調査をみると、家庭でのお手伝いが総じて高い関係を示している。当機構においても、平成18年度から「早寝早起き朝ごはん」運動を推進するとともに、その中で「読書・手伝い・外遊び」を推奨している。

今回の調査結果をも踏まえ、新たに、青少年育成に携わる団体と連携し、青少年の健全な成長にとって、体験がいかに重要であるかを広く家庭や社会に知っていただき、社会全体で子どもたちの様々な体験活動の促進・充実を図ることを目的として「体験の風をおこそう運動」をスタートさせたところである。今後、この運動が広く国民の皆様方に浸透することを願うものである。

1. 目的

本研究は、子どもの頃の体験を通じて得られる資質・能力を検証し、人間形成にとってどの時期にどのような体験をすることが重要になるのかを明らかにすることを目的とした。

2. 調査内容

(1)子どもの頃の各年齢期における体験(p.22 表①)

自然体験, 動植物とのかかわり, 友だちとの遊び, 地域活動, 家族行事, 家事手伝い

(2)体験の力(p.22 表②)

自尊感情, 共生感, 意欲・関心, 規範意識, 人間関係能力, 職業意識, 文化的作法・教養

(3)葛藤場面における意識

(4)その他(最終学歴, 現在の年収, 1ヶ月に読む本の冊数 等)

3. 調査方法

(1)成人調査

①調査対象 20代～60代の成人 5,000人

内訳:各年代で男女各500人

抽出:回答者の居住する地域, 性, 年齢, 既婚・未婚及び就労・未就労の割合が, 実社会の構成比と大幅に異ならないように配慮して抽出した。

②調査方法 ウェブアンケート調査

③調査期間 平成21年11月13日(金)～16日(月)

(2)青少年調査

①調査対象 小学校高学年から高校生までの青少年 約11,000人

内訳:小学5年生2,860人(回収率98%), 小学6年生2,830人(回収率98%),

中学2年生2,480人(回収率98%), 高校2年生2,844人(回収率99%)

抽出:都市や学校規模を配慮して抽出した。

②調査方法 学校を通した郵送法による質問紙調査

③調査期間 平成21年11月27日(金)～12月18日(金)

4. 研究会

座長 明石 要一(千葉大学教育学部教授)

委員 青山 鉄兵(桐蔭横浜大学スポーツ健康政策学部助教)

岩崎 久美子(国立教育政策研究所生涯学習政策研究部総括研究官)

金藤 ふゆ子(常磐大学人間科学部准教授)

時 代(千葉大学教育学部客員研究員)

茅野 敏英(国立青少年教育振興機構客員研究員)

土屋 隆裕(統計数理研究所データ科学研究系調査解析グループ准教授)

表① 各年齢期における子どもの頃の体験

<p>[自然体験]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・海や川で貝を採ったり、魚を釣ったりしたこと ・海や川で泳いだこと ・太陽が昇るところや沈むところを見たこと ・夜空いっぱい輝く星をゆっくり見たこと ・湧き水や川の水を飲んだこと 	<p>[動植物とのかかわり]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・米や野菜などを栽培したこと ・花を育てたこと ・ペットなどの生き物の世話をしたこと ・チョウやトンボ、バッタなどの昆虫をつかまえたこと ・野鳥を見たり、鳴く声を聞いたこと
<p>[友だちとの遊び]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・かくれんぼや缶けりをしたこと ・ままごとやヒーローごっこをしたこと ・すもうやおしくらまんじゅうをしたこと ・友人とケンカしたこと ・弱い者いじめやケンカを注意したり、やめさせたこと 	<p>[地域活動]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・近所の小さい子どもと遊んであげたこと ・近所の人に叱られたこと ・バスや電車で体の不自由な人やお年寄りに席をゆずったこと ・祭りに参加したこと ・地域清掃に参加したこと
<p>[家族行事]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家族の誕生日を祝ったこと ・お墓参りをしたこと ・家族の病気の看病をしたこと ・親戚、友人の家にひとりで宿泊したこと ・家族で家の大掃除をしたこと 	<p>[家事手伝い]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ナイフや包丁で、果物の皮をむいたり、野菜を切ったこと ・家の中の掃除や整頓を手伝ったこと ・ゴミ袋を出したり、捨てたこと ・洗濯をしたり干したりしたこと ・食器をそろえたり、片付けたりしたこと

表② 体験を通して得られる資質・能力(体験の力)

<p>[自尊感情]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分のことが好きである ・家族を大切にできる人間だと思う ・学校が好きである ・今、住んでいる町が好きである ・日本が好きである 	<p>[共生感]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・休みの日は自然の中で過ごすことが好きである ・動物園や水族館などに行くのが好きである ・悲しい体験をした人の話を聞くとつらくなる ・友だちがとても幸せな体験をしたことを知ったら、私までうれしくなる ・人から無視されている人のことが心配になる
<p>[意欲・関心]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・もっと深く学んでみたいことがある ・なんでも最後までやり遂げたい ・経験したことのないことには何でもチャレンジしてみたい ・分からないことはそのままにしないで調べたい ・いろいろな国に行ってみたい 	<p>[規範意識]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・叱るべき時はちゃんと叱れる親が良いと思う ・交通規則など社会のルールは守るべきだと思う ・電車やバスの中で化粧や整髪をしても良いと思う ・電車やバスに乗ったとき、お年寄りや身体の不自由な人には席をゆずろうと思う ・他人をいじめている人がいると、腹が立つ
<p>[人間関係能力]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人前でも緊張せずに自己紹介ができる ・けんかをした友だちを仲直りさせることができる ・近所の人に挨拶ができる ・初めて会った人とでもすぐに話ができる ・友だちに相談されることがよくある 	<p>[職業意識]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分にはなりたい職業や、やってみたい仕事がある ・大人になったら仕事をするべきだと思う ・できれば、社会や人のためになる仕事をしたいと思う ・お金が十分にあれば、できれば仕事はやりたくないと思う ・今が楽しければ、それでいいと思う
<p>[文化的作法・教養]</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お盆やお彼岸にはお墓参りに行くべきだと思う ・目上や年下の人と話すときは丁寧な言葉を使うことができる ・ひな祭りや子どもの日、七夕、お月見などの年中行事が楽しみだ ・はしを上手く使うことができる ・日本の昔話を話すことができる 	